

〔問14〕 漢字のフラッシュカードを行っていると、よく読める子とそうでない子がいます。このようなカード類を、ただ見せて何と読めるか聞かせるだけで良いのでしょうか。

〔答〕 漢字カードを読むということは、ただ発音できるということであってではありません。その漢字の意味する内容が、まざまざと頭の中に展開されるようであればなりません。そのために石井方式では「漢字で教える」と言って、経験させることを重視しているのです。牛を見たことのない子に牛という漢字を教えて、その漢字が読め、また書けたとしても意味がない。まず牛を実際に見せて、その牛を“うし”と言い、“牛”という字で表わすことを理解させます。そうすれば、“牛”という漢字を見れば、かつて見た牛そのものの姿を頭の中にまざまざと思い浮かべることが出来ます。

漢字カードを読むということは、そういうことでなければなりません。そうすれば、どの子も漢字カードを読むことを楽しむようになるものです。次にどんな学習でもそうですが、よく出来る子とそうでない子が必ずいます。子供によって能力が違うからです。私は能力の差は生まれながらにあるものだからどうしようもないものだと思います。仮に皆が同じような能力を持っていたら、世の中が困ってしまうでしょう。全ての人が総理大臣になれる能力を持って大臣になったら、その他の仕事をやる人がいなくなってしまうでしょう。人間の社会にはいろいろな

能力の人がいて、いろいろな職業があるのです。教育において全ての子供を見かけ上同じような段階にもってゆくということは、手を抜かなければ出来ないことです。運動会の競争を見ても明らかで、真剣に走れば走るほど一着とビリの差は広がり力を抜いていい加減に走れば皆一団となってゴールに突入することが出来ます。子供達の能力を十分に発揮させた上で、同じようにゴールさせようとしても、それは不可能です。ところが多くの教育者は、皆同一ゴールすることが理想と考えているのです。能力のある者が力を抜かない限り同じようにすることは出来ません。戦後の日本の教育は、はっきり言ってエセ民主主義です。ヨ一ロで八等では徹底的に、エリートとそうでない者とを区別する選別教育です。ドイツでは中学の時点で選別し、イギリスではEleven Testと言って、十一歳になると国家試験を一斉に受けさせて、上の学校へ行く子を選定しています。私は英才教育に賛成です。英才は英才として教育されないとのみびません。集団でゴールさせようという教育では、せっかくの英才も駄目になってしまいます。英才は自分の能力を十二分に発揮できるような環境において教育されるべきで、それに適した難問をどしどし課さなければいけません。そういう教育を今の日本人はしていません。

精薄児対象の特殊学級が必要なように、英才対象の特殊学級があっていいわけです。それがほんとの民主主義というもので、全ての子が同じ力を持つのが決して理想ではありません。